

戸田山和久『恐怖の哲学』書評会:  
情動の哲学理論からアプローチするフィクション論と意識の哲学

オーガナイザー：西條玲奈 (北海道大学)  
提題者：源河亨 (日本学術振興会・東京大学)  
森功次 (東京大学・山形大学)  
鈴木貴之 (南山大学)  
戸田山和久 (名古屋大学)

---

本ワークショップの目的は、知覚や心の哲学と芸術の哲学が、互いにどのように関連するのか、あるいは独立なのかを示すことにある。これに鑑みると、戸田山和久著『恐怖の哲学』(2016, NHK出版)はホラー作品の鑑賞体験を手がかりに、情動、フィクション、意識をめぐる近年の哲学的問題の関連性を、各領域について著者自身の見解を交えつつ提示した仕事であり、各専門家を交えた議論の場とするに相応しいものである。とりわけ情動の哲学的理論は、いまだ国内で十分に検討されているとはいいがたく、関連分野との接続を示すことはそれぞれの進展にとっても有意義だと言える。

ここでは、本書の構成に即し、3名の提題者に内容の批判的検討をおこなってもらう。第1部での情動の理論に即した恐怖の定義をめぐる議論について、本書が依拠するJesse Prinzの仕事にも通じた心の哲学研究者である源河亨氏。第2部での、「恐怖」を引き起こすフィクションをなぜわれわれは楽しめるか、というパズルの解消とホラージャンルの定義を目指す議論について、著者が批判するKendal Waltonの理論的背景に通じた分析美学者である森功次氏。そして、第3部で、個人がもつ恐怖の「感じ」を意識の物理主義的アプローチに即して解明する議論について、著者のアイディアの基盤である意識の表象理論を、著書『ぼくらが原子の集まりなら、なぜ痛みや悲しみを感じるのだろうか』(2015, 勁草書房)で擁護する鈴木貴之氏。各論者の批判に対して著者である戸田山氏との応答を経た後、会場全体での議論をおこない活発な意見交換の場とすることを目指す。